

I 次の文章を読んで、後の問い(問1～13)に答えよ。(配点 75)

甲

有名なソクラテスの「無知の知」は、彼の友人が「ソクラテスより賢い人はいるか」と神に尋ねたところ、「誰もいない」という神託を受けたということから話が始まる。この神託に驚いたソクラテスは、世間の知者を次々に訪ねて、彼らと問答してみた。その結果、「ア」  
という点で、もしかしたら彼らより賢いのもかもしれないという結論に達したという話だ。このエピソードはとても有名だが、ではソクラテスが驚いたというこの神託がどこで下されたものか、ご存知だろうか？

それは古代ヨーロッパで人々の信仰を集め続けた神託の地・デルフォイである。デルフォイはギリシャの首都アテネから西北へ120キロメートルほどの所に位置するバルナツソス山の西南麓にある聖地であり、ギリシャ神話では全能の神ゼウスが世界の中心と決めた場所と言い伝えられている。この聖地は標高600メートルくらいの山の斜面にあり、アポロン神殿を中心とする神域に都市部が隣接した、かつての都市国家(ポリス)であった。

このデルフォイの神託は、驚くほど長い間、ギリシャのみならずヨーロッパ各地から最も權威ある神託として **イ** 。その期間は紀元前8世紀頃に始まり、紀元後392年にローマ皇帝テオドシウス1世がキリスト教以外の異教祭祀を禁じたことで終焉を告げるが、この間の1000年以上にわたっている。

デルフォイの神託には数々の有名な例があるが、その中でもギリシャが国家滅亡の危機に瀕していた紀元前5世紀に授けられた神託は、その名声を確立するものとなった。当時、ギリシャの東には、エジプトからインドに接する領域までを支配していた超巨大国家アケメネス朝ペルシアが隣接していたが、そのペルシアが本格的にギリシャトウバツ<sup>a</sup>に乗り出してきた。ギリシャ最大の危機、ペルシア戦争である。

ペルシア軍はおよそ700隻の大艦隊と5万とも10万とも伝えられる大兵団を送り込み、破竹の勢いで攻め上がり、アテネへ侵攻しようとしていた。ギリシャ連合軍はこのペルシア軍に対してどう立ち向かうべきか、デルフォイの神託を仰ぐこととなった。使者が持ち帰った神託の核となる部分は、次のようなものだった。

「ゼウスは、トリトゲネス女神(アテナ)に木の壁を、唯一の不落の抛り所となり、汝と汝の子らを救わんがために与えたまうであらう」

(『ギリシア神話入門…プロメテウスとオイディプスの謎を解く』吉田敦彦著)

この「木の壁」の解釈を巡って、ギリシャ連合軍の中で論争が起こった。ある者は、木の壁とはアテネのアクロポリスの回りを囲む丸太や板で作った防壁壁のことで、アクロポリスに籠城して戦うべきだと主張した。しかし、アテネのテミстокレス将軍は、木の壁とは船を指すもので、ペルシアの艦隊を海上で迎撃すべきと主張し、実際に海軍を率い、サラミスの海戦でこれを打ち破った。これがペルシア戦争における決定的なテンキとなり、その後ペルシア軍はテッタイしていくことと

なる。ギリシャ存亡の危機は、デルフォイの神託とテミストクレスにより救われたのだった。

## 乙

このデルフォイの神託とは、どのようなものであったのだろうか？ それはアポロン神殿の中心にある地中深く掘られた特別な場所で執り行われていた。そこには岩がむき出しになっている部分があり、その岩には裂け目があった。裂け目の上に高さ1メートルほどの三脚台が置いてあり、ここに神託を授かるピュティアと呼ばれる純潔の巫女が座った。ピュティアは神託の前には断食をし、多くの清めのギシキを行ったと伝えられている。泉で沐浴をして身を清め、神聖な泉の霊水を飲み、月桂樹を燻して煙を吸い込み、その葉を噛んだ。その巫女が三脚台に座り、目を閉じ、大きく深呼吸をする。しばらくすると予言の神アポロンが降臨したかのように、巫女は普段とは違う声質で話し始め、時につじつまの合わない意味不明の言葉を発した。そのトランス状態になった巫女の言葉を傍らの男性神官が書き留め、その意味が解釈され、インブンの形に直された。これが「デルフォイの神託」であった。

1996年から米国の地質学者・化学者・毒物学者などの科学者チームがこの「デルフォイの神託」の謎に挑んだ。その報告が2003年の『サイエンティフィック・アメリカン』誌に発表されている。最も重要な発見は、デルフォイにはいくつかの断層線が走っており、アポロン神殿の下では、ちょうど2本の断層線が交差しているということだった。この断層には特殊な石灰岩層が含まれており、断層の摩擦で加熱されると、そこから化学物質が気化することが予想された。それが湧き水とともに断層を伝って地表に上ってきていた可能性が指摘されたのだった。

では、一体どんな化学物質が地下からもたらされていたのか？ デルフォイの泉の水や、古代の泉によってできたと考えられる沈殿岩の化学分析の結果、メタン、エタンそしてエチレンが検出された。古代ギリシャの伝記作家であったプルタルコスによれば、巫女の座る岩の割れ目からは「プネウマ」といわれる霊気のようなものが出ており、さらに霊水を飲むことで、巫女はトランス状態になるとされた。チーム内の科学者はこの巫女のトランス状態と、化学分析の結果得られたエチレンの関係に注目した。エチレンには麻酔薬のような効果があり、実際に低濃度のエチレンを被験者に与えることで、体外遊離やトウスイカンのようなものが得られ、一種のトランス状態に導かれることが示された。

歴史家ディオドロスの記録書によると、元々デルフォイのあるバルナツソス山麓で、山羊が狂ったように飛び跳ねたり、急に倒れ込んで体を痙攣させたりすることがあり、調べてみると、山羊たちは大地の割れ目から吹き出してくる気流を吸い込んでいた。人がそれを吸うと、奇妙な言葉が自分の口から出て来るのを止められなかったという。これがデルフォイの神託が行われるきっかけとなったということなのだ。

つまりアポロン神殿奥にある岩の割れ目から吹き出してくるエチレンガスの効果で、巫女が一種のトランス状態になり、ラリった巫女のうわごとを書き留めたのが、1000年以上もの間、信仰を集め続けた「デルフォイの神託」の正体だったということになる。ソクラテスもがっかりだ。

## 装置としての「デルフォイの神託」

しかし、ではデルフォイの巫女の口から発せられる神託が、なぜ、それほどまでに高い信頼を勝ち得たのだろうか？ それは単なる偶然だったのか、それとも何か理由があったのだろうか？ 予言の神アポロンのご霊験を根拠もなく否定するのもバチが当たりそうだが、一つの説明として考えられるのは、巫女の言葉を書き留める神官の存在である。この神官は多くの場合、学識ある男性が従事しており、それが巫女の言葉を「翻訳する」過程で、ある種の理性的な情報操作が行われた可能性があることは否定できない。神託は月に1回であり、依頼者の質問に対する事前の調査も含めて、神託の評判を落とさないように細心の注意が払われていたことは想像に難くない。また、この神官たちに賄賂を贈って神託を左右することが行われていたとも言われている。

結局のところ、こういった「デルフォイの神託」のような世界各地にある神のお告げは、たとえば国難など誰もが簡単に判断できない問題に対する社会合意を形成するための「装置」として働いていたという見方もできる。有名なウィーン会議における「会議は踊る、されど会議は進まず」という言葉を引くまでもなく、利害も立場も考え方も異なる人間たちが、難しい問題について協議すれば、普通に考えて簡単に話はまとまらない。絶対王政のように権力を集中させるのなら別だが、合議制であれば、イザという時に皆を納得させるための

ウ

。「デルフォイの

神託」がギリシャの地で長らく必要とされたのは、古代ギリシャが民主政であったことと、恐らく無縁ではない。

だから「神託」が実際は賄賂のようなもので捻じ曲げられていたとしても、そんなことは大きな問題ではなかった。国民を納得させ、特定の方角に一致協力して向かわせることが大切なのである。そして「神託」であれ、「王」であれ、「教会」であれ、社会合意を形成するための装置にとつて、最も必要なものは権威である。それは時に神秘性を持たせたカリスマであり、その権威を疑う者は、社会的に厳しく罰せられなければならない。それはそれら装置の権威が失われれば、社会秩序の崩壊につながるからである。

## 現代の「神官」たち

翻って、「神託」を持たない現代の民主主義国家では、この問題にどう対処しているのだろうか？ 意見の異なる国民をどう納得させ、合意が作られているか？ もちろん様々なケースがあるが、非常に大切な装置の一つが、実は科学である。現代社会では、「理性で世界を理解することができると信じられており、

エ

ことになっている。だから、たとえば新しい医薬

品が安全かどうか、遺伝子組み換え食品を認めるのか、あるいは再生医療をどこまで人間に適用すべきか。こういった議論が分かれかねない問題については「科学的に解決されるべし」ということになる。

しかし、科学はこういった現実の問題に対して、本当に適切な社会合意をもたらすような「神託」を常に与え得るだろうか。原発問題はどうか？ かつて「日本の原発は絶対に安全」と言っていた「権威」たちは、今や「原発の安全について、担保しないし、判断しない」と言っているのではないか。また、地球温暖化問題はどうか？ アメリカの「二酸化炭素の増加が地球温暖化の原因だとする科学的証拠はない」という主張は本当なのだろうか？ 「神託」を左右する「神

「官」たちは今も昔も、様々な働きかけを受けており、現代の「巫女」の発する言葉（たとえば実験データ）も、その多くが実は「神官」以外には意味不明なのである。

中屋敷 均「科学と非化学 その正体を探る」（講談社 2019年）

※ 問題作成にあたり、本文を一部改変した。

問1 傍線部 a ～ g のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直せ。解答は、解答用紙の所定欄に読みやすいはつきりした楷書体で書くこと。解答番号は  ～  。

a	トウバツ	<input type="text" value="1"/>
b	籠城	<input type="text" value="2"/>
c	テンキ	<input type="text" value="3"/>
d	テツタイ	<input type="text" value="4"/>
e	ギシキ	<input type="text" value="5"/>
f	インブン	<input type="text" value="6"/>
g	トウスイカン	<input type="text" value="7"/>

問2 空欄  に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから

一つ選べ。解答番号は  。

- ① 彼らは私を賢者と認めている
- ② 彼らは他者の知を認めている
- ③ 私は自分の無知を知っている
- ④ 彼らは私よりも狡猾とされる
- ⑤ 私は自分の世界を探している
- ⑥ 彼らは知を有効活用している

問3 空欄

イ

一つ選べ。解答番号は

9

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから

- ① 首が繋がっていた
- ② 恨みを買ってきた
- ③ 嫌気がさしてきた
- ④ 頭を悩ましていた
- ⑤ 胡座をかいていた
- ⑥ 名声を博してきた

問4 空欄

ウ

一つ選べ。解答番号は

10

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから

- ① 装置となる議論が必要だ
- ② 社会的な議論を要すのだ
- ③ 社会的装置が必要なのだ
- ④ 社会装置の俯瞰が必要だ
- ⑤ 強制的な装置を要すのだ
- ⑥ 社会的な議会制が必要だ

問5 空欄

エ

一つ選べ。解答番号は

11

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから

- ① 科学がその世界の姿を解き明かす役割を果たす
- ② 科学は世界を支配するための役割を担っている
- ③ 権力者が世界を支配するために科学を利用する
- ④ 世界を幸せに導くために科学が活用されている
- ⑤ 科学が人々の精神世界を解明する役割を果たす
- ⑥ 科学が人類の真の姿を明らかにする役割を担う

問6 傍線部A「破竹の勢い」の本文中の意味として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 12。

- ① 竹が折れるほどの強い風に負けない勢いで進む様子
- ② 竹が横にきれいに割れていくような勢いで進む様子
- ③ 竹が正確に切り倒されていくような勢いで進む様子
- ④ 竹が斜めに切れていくような静かな勢いで進む様子
- ⑤ 竹が次々と折れていくときのような勢いで進む様子
- ⑥ 竹が縦に割れるときのような激しい勢いで進む様子

問7 傍線部B「チーム内の科学者はこの巫女のトランス状態と、化学分析の結果得られたエチレンの関係に注目した」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 13。

- ① 巫女が「ブネウマ」といわれる霊気のようなもののみでトランス状態を引き起こすことを明確にした科学者は、エチレンにも同様の効果があることを知っていたから。
- ② 巫女のトランス状態を引き起こす物質は、アポロン神殿の下にある特殊な石灰岩層が摩擦によって気化したもので、これがギリシア独自のものであったから。
- ③ 巫女のトランス状態を引き起こす物質は、古代ギリシアではいたるところにあったエチレンであったから。
- ④ 巫女がトランス状態を引き起こした物質と沈殿岩から吹き出る物質とは、化学式がまったくの同一であったから。
- ⑤ 巫女のトランス状態は、低濃度のエチレンを吸引したときに引き起こされる状態と類似していたから。
- ⑥ 巫女のトランス状態は、断層が摩擦することによって生成されるエチレンを吸引したときに起こる状態であると過去に議論されていたから。

問8 傍線部C「ソクラテスがっかりだ」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 14。

- ① 自分が天才であるという噂が、実際は巫女のうわごとを書き留めたものであったから。
- ② 巫女が身命を賭して受けた神託が、賄賂を受領した「神官」によるものであったから。
- ③ 巫女の都合によって「ソクラテスが最も賢い」という神託が広まることになったから。
- ④ ギリシャの知者と議論を重ねた結果、巫女が自分の知っていた者と異なっていたから。
- ⑤ ソクラテスは賢者であるという「神託」は、巫女のうわごとによるものであったから。
- ⑥ ソクラテスの驚いた神託が、実は化学物質に影響された巫女のうわごとであったから。

問9 傍線部D「そんなことは大きな問題ではなかった」の理由として最も適当なものを、次の

①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は

15。

- ① 神官が巫女のうわごとを適当に解釈して、「神託」に関わる情報を操作していたとしても、社会秩序を維持するため、「王」によって認められていたから。
- ② 神官が賄賂を受け取ることで実際の「神託」を捻じ曲げることがあったとしても、それは「教会」が認めていた情報操作の範囲で行われていたと現代では推測されているから。
- ③ 巫女の言葉を「翻訳する」神官たちが不正を行っていたとしても、権威を有する「神託」は民主政であった古代ギリシヤにとって社会秩序を維持するために必要であったから。
- ④ 神官が利害も立場も考え方も異なる国民を納得させるために「デルフォイの神託」を利用していても、国民を一致団結させる「神託」を人々が必要としていたから。
- ⑤ 神官が「神託」の情報を操作していたとしても、欧州全体をまとめることができるのであれば、それは必要なものと古代ギリシヤの民主政では認められていたから。
- ⑥ 神官が「神託」を伝達する目的は、国民を特定の方向に一致協力して向かわせることであり、そのために神託に関わる情報を操作することが一般社会では許されていたから。

問10 傍線部E「その多くが実は『神官』以外には意味不明なのである」の説明として最も適当な

ものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は

16。

- ① 古代ギリシヤにおいて、「巫女」のうわごとを解釈できる人が「神官」以外にいなかったように、現代でも一般人にはわかりにくい実験データについて説明できるのは、専門領域の学者以外にいないということ。
- ② 「デルフォイの神託」をそのまま世間一般に示していた「神官」と同様に、現代の「神官」たちも様々な圧力を受けつつも、現代の「巫女」のことはによる成果を社会に発信しようとして試みているということ。
- ③ 「巫女」のうわごとと相当する、例えば現代の原発問題・温暖化問題で出される実験データなどは、様々な圧力を受けているので、データ本来の意味もそのことを対象に研究している科学者以外にはわからないということ。
- ④ 古代ギリシヤにおいて、「巫女」のうわごとを活用できる人が「神官」以外にいなかったように、現代でも実験データを社会のために有効活用できるのは、働きかけを受けているとしてもそのデータ改変に従事した「神官」だけであるということ。
- ⑤ 「デルフォイの神託」を解釈する神官が自己の評判を落とさず、理性的な情報操作を行っていたように、現代の「神官」も様々な外圧を受けつつも自己の評判が良くなるように実験データを操作しているということ。
- ⑥ 現代の「神官」たちは目に見える現象だけではなく、科学にとって都合のよい社会を構築するために、有益な実験データを付加することを行っており、この行為がデルフォイの「神託」で行っていた「神官」と共通しているということ。

問11 空欄

甲

から一つ選べ。解答番号は 17 に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑧のうち

- ① ソクラテスが気づいた真実
- ② 権威化する「神託」の正体
- ③ 権威あるお告げの正体とは
- ④ アクロポリスに見る攻防戦
- ⑤ 都市国家と「神託」の関係
- ⑥ 現実化する世界と「神託」
- ⑦ 国家を決定づける「神託」
- ⑧ ギリシヤを救った「神託」

問12

空欄

乙

から一つ選べ。解答番号は 18 に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑧のうち

- ① 世界を突き動かす巫女の覚醒
- ② 科学が引き起こす巫女の覚醒
- ③ トランス状態の原因は石灰岩
- ④ 化学物質が引き起こした奇跡
- ⑤ 「神託」の謎に迫る科学のメス
- ⑥ 世界は一握りの人が支配する
- ⑦ 科学が解き明かす巫女の覚醒
- ⑧ 科学が世界を変えるきっかけ

問13

本文の内容に合致するものを、次の①～⑧のうちから二つ、選べ。ただし、二つとも正解しなければ点を与えない。解答の順序は問わない。解答番号は

19

20

- ① 古代ヨーロッパで信仰を集めたデルフォイの神託は、全能の神であるゼウスがその年に世界の中心と決めた場所で行われ、1000年以上にわたってヨーロッパ各地にある「神託」の中でも最も「権威」あるものとされていた。
- ② アポロン神殿の地中深くにある特別な場所で、審判の神が降臨したかのような巫女が普段とは異なる状態で意味不明の言葉を発したものを、神官が書き留めて「翻訳した」ものがデルフォイの神託である。
- ③ 歴史家ディオドロスは、パルナッソス山麓で、山羊たちが大地の割れ目から吹き出す化学物質を吸い込んで騒いでいる姿を神からの啓示とし、これがデルフォイの神託が行われる契機になったと歴史書で指摘している。
- ④ 例えば、有名なウィーン会議における「会議は踊る、されど会議は進まず」という言葉からも分かるように、合議制では話をまとめることは難しいので、構成員を納得させるために「デルフォイの神託」のような「権威」を絶対王政では必要とした。
- ⑤ 為政者は都市国家に属する人々を国家の目的に対して一致協力させるために、神秘性を有している「神託」を必要悪として利用し、社会秩序の維持・向上を図っていたと筆者は推察している。
- ⑥ ペルシア戦争時にデルフォイの神託を仰いだギリシャ連合軍が、ペルシアの艦隊をサラミスの海戦で打ち破ったことをきっかけとしてギリシャ存亡の危機を脱したという事実は、デルフォイの神託の地位を確たるものにした。
- ⑦ 「神託」を持たない現代の民主主義国家は、原発・薬品・食品・環境などに関する諸問題について「科学的に解決されるべし」といった共通理解を持っており、このことが科学への依存度を高めると我々は考えている。
- ⑧ 米国の地質学者などで構成される科学者チームは、アポロン神殿の下に2本の断層線が交差していることから、断層の摩擦によってその特殊な石灰岩層が加熱され、化学物質が気化し、それが地表に上った可能性を指摘した。

Ⅱ 次の文章を読んで、後の問い(問1～14)に答えよ。(配点 75)

甲

ドイツの社会学者ウルリッヒ・ブラントとマルクス・ヴィッセンは、<sup>(注1)</sup>グローバル・サウスからの資源やエネルギーの収奪に基づいた先進国のライフスタイルを「<sup>A</sup>帝國的な生活様式」(imperial Lebensweise)と呼んでいる。

帝國的な生活様式とは要するに、グローバル・ノースにおける大量生産・大量消費型の社会のことだ。それは先進国に暮らす私たちにとっては、豊かな生活を実現してくれる。その結果、帝國的な生活様式は望ましく、魅力的なものとして受け入れられている。だが、その裏では、グローバル・サウスの地域や社会集団から収奪し、さらには私たちの豊かな生活の代償を押しつける構造が存在するのである。

問題は、このような収奪や代償の転嫁なしには、帝國的な生活様式は維持できないということだ。

グローバル・サウスの人々の生活条件の悪化は、資本主義の I であり、南北の支配従属関係は、例外的事態ではなく、平常運転なのである。

ひとつ例を挙げよう。私たちの生活にすっかり入り込んだファスト・ファッションの洋服を作っているのは、劣悪な条件で働くバンングラデシユの労働者たちである。二〇一三年に、<sup>a</sup>五つのホウセイ工場が入った商業ビル「ラナ・プラザ」が崩壊し、一〇〇〇人以上の命が犠牲になる事故があったのは有名だ。

そして、バンングラデシユで生産される服の原料である綿花を栽培しているのは、四〇℃の酷暑のなかで作業を行うインドの貧しい農民である。ファッション業界からの需要増大に合わせて、遺伝子組み換えの綿花が大規模に導入されている。その結果、自家採取の種子が失われ、農民は、遺伝子組み換え品種の種子と化学肥料、除草剤を毎年購入しなくてはならない。干ばつや熱波のせいでは不作ともなれば、農民たちは借金を抱えて、自殺に追い込まれることも少なくない。

<sup>B</sup>ここでの悲劇は、帝國的な生活様式による生産と消費に依存しているグローバル・サウスも、グローバル資本主義の構造的な理由から、この平常運転に依存せざるを得ないことにある。

<sup>(注2)</sup>先述したように、ブラジル人も、ブルマジーニョの尾鉾ダムが危険なのはわかっていた。同様の事故は起きていたのだ。だが、それにもかかわらず、<sup>b</sup>採掘を続けるよう強制されるのである。そこで働く労働者たちも自らの生活のために、採掘現場で働き、その近くに住むしかないのだ。

バンングラデシユのラナ・プラザのホウセイ工場でも、事故の前日に従業員たちは、壁や柱の異常に気がついてはいたが、その声は無視されたのだ。また、インド人も、除草剤が身体や自然に有害だとわかっている。それでも、ファッション産業の市場は拡大していき、世界中の需要を満たすために生産続行が強制される。

そして、犠牲が増えるほど、大企業の収益は上がる。これが資本の論理である。

### 犠牲を不可視化する外部化社会

もちろん、このような耳の痛い指摘は、<sup>c</sup>これまでも何度もなされてきた。けれども、私たちは、いくばくかのお金を寄付するくらいで、すぐにまた忘れてしまう。すぐに忘れることができるのは、

これらの出来事が、日常においては不可視化されているからである。

ミュンヘン大学の社会学者シュテファン・レーセニツヒは、このようにして、代償を遠くに転嫁して、不可視化してしまうことが、先進国社会の「豊かさ」には不可欠だと指摘する。これを「外部化社会」と彼は呼び、批判するのだ。

先進国は、グローバル・サウスを犠牲にして、「豊かな」生活をキョウジュしている。そして、「今日だけでなく、明日も、未来も」この特権的な地位を維持しようとしているとレーセニツヒはダンザイする。「外部化社会」は、絶えず外部性を作り出し、そこにさまざまな負担を転嫁してきた。私たちの社会は、そうすることでのみ、繁栄してきたのである。

乙

先進国の資本主義とグローバル・サウスの犠牲の関係について、もつと有名なイマニユエル・ウォーラー斯坦の「世界システム」論を使って、簡単にまとめてみよう。

ウォーラー斯坦の見立てでは、資本主義は「中核」と「周辺」で構成されている。グローバル・サウスという周辺部から廉価な労働力を搾取し、その生産物を買ひ叩くことで、中核部はより大きな利潤を上げてきた。労働力の「不等価交換」によって、先進国の「過剰発展」と周辺国の「過小発展」を引き起こしていると、ウォーラー斯坦は考えたのだった。

ところが、資本主義のグローバル化が地球の隅々まで及んだために、新たに収奪の対象となる、「フロンティア」が消滅してしまった。そうしたア。利潤率が低下した結果、資本蓄積や経済成長が困難になり、「資本主義の終焉」が謳われるまでになっている。

ただ、この章で指摘したいのは、その先の話である。ウォーラー斯坦が主に扱っていた搾取対象は人間の労働力だが、それでは、資本主義の片側しか扱ったことにならないからだ。

もう一方の本質的側面、それが地球環境である。資本主義による収奪の対象は周辺部の労働力だけでなく、地球環境全体なのだ。資源、エネルギー、食料も先進国との「II」によってグローバル・サウスから奪われていくのである。人間を資本蓄積のための道具として扱う資本主義は、自然もまた単なる掠奪の対象とみなす。このことが本書の基本的主張のひとつをなす。

そして、そのような社会システムが、無限の経済成長を目指せば、地球環境が危機的状況に陥るのは、いわば当然の帰結なのである。

### 外部化される環境負荷

要するに、ウォーラー斯坦の議論を拡張すれば、中核部は、資源を周辺部から掠奪し、同時に経済発展の背後に潜むコストや負荷を周辺部に押しつけてきたのである。

日本人の生活の影の主役になっているパーム油を例に取ろう。パーム油は価格が安いだけでなく、酸化しにくいため、加工食品やお菓子、あるいはファストフードなどでよく利用されている。

このパーム油が生産されているのが、インドネシアやマレーシアである。パーム油の原料となるアブラヤシの栽培面積は、今世紀に入ってから倍増しており、熱帯雨林の乱開発による森林破壊が急速に進んでいる。

急増するパーム油の生産の影響は、熱帯雨林の生態系の破壊だけではない。大規模な開発は、熱

帯雨林の自然に依存してきた人々の暮らしにも破壊的な影響を与えている。例えば、熱帯雨林を農園として切り拓いた結果、ドジョウ侵害が起き、肥料・農薬が河川に流出して、川魚が減少しているのだ。この地域の人々は、川魚からたんぱく質を取っていたが、それができなくなり、お金が以前より必要となった。その結果、金銭を目当てに野生動物、とりわけオランウータンやトラなど絶滅危惧種の違法取引に手を染めるようになったのだ。

このように、中核部での廉価で、便利な生活の背後には、周辺部からの労働力の搾取だけでなく、資源の収奪とそれに伴う環境負荷の押しつけが欠かせないのである。

それゆえ環境危機が引き起こす被害に、地球上の人々がみな等しく苦しむわけではない。食料やエネルギーや原料の生産・消費に結びついた環境負荷は不平等に分配されているのだ。

「外部化社会」として先進国をキユウダンするレーセニツヒによれば、このように、「どこか遠く」の人々や自然環境に負荷を転嫁し、その真の費用を不払いにすることこそが、私たちの豊かな生活の前提条件なのである。

### 丙

こうして帝国的生活様式は、日常の私たちの生活を通じて絶えず再生産される。一方で、その暴力性は遠くの地で発揮されているため、不可視化され続けてきた。

環境危機という言葉を知って、私たちが免罪符的に行うことは、エコバッグを「買う」ことだろう。だが、そのエコバッグすらも、新しいデザインのものが次々と発売される。宣伝に刺激され、また次のものを買ってしまう。そして、免罪符がもたらす満足感のせいで、そのエコバッグが作られる際の遠くの地での人間や自然への暴力には、ますます無関心になる。資本が謀るグリーン・ウォッシュに取り込まれるとはそういうことだ。

先進国の人々は単に「転嫁」に対する「無知」を強制されるだけではない。自らの生活をより豊かにしてくれる、帝国的生活様式を望ましいものとして積極的に内面化するようになっていくのである。人々は無知の状態を欲望するようになり、真実を直視することを恐れる。「知らない」から「知りたくない」に変わっていくのだ。

しかし、自分たちがうまくいっているのは、誰かがうまくいっていないからだ。私たちが暗に気がついているのではないか。

現代ドイツを代表する哲学者マルクス・ガブリエルが述べているように、その不正を「自分たちに関係のないことだと、(中略)見ないようにしてしまう」だけなのだ。直視することに耐えられない、だから「私たちがその不正を引き起こしている原因だと知っていないながら、現在の秩序の維持を暗に欲している」。

### イ

。だが、その報いがついに気候危機として中核部にも及びよってきている。

斎藤 幸平 「人新世の『資本論』(集英社 2020年)

(注一) グローバル・サウス：新興国の台頭や先進国への移民の増大をはじめとして近年のグローバル化によって、かつての地理的な「南北問題」では説明できない事象・問題

を説明するための用語。グローバル・サウスはグローバル化によって被害を受ける領域と住民の総称。グローバル・ノースはその反意語。

(注二) 先述したように、具体的には、二〇一九年一月にブラジルのミナスジェライス州にあるブルマジーニョダムの決壊により死者二〇〇人以上を出した事故を指している。

(注三) グリーン・ウォッシュ：企業やその商品・サービスなどが、あたかも環境に配慮しているかのように見せかけること。

※ 問題作成にあたり、本文を一部改変した。

問1 傍線部 a～f のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直せ。解答は、解答用紙の所定欄に読みやすいはつきりした楷書体で書くこと。解答番号は  ～  。

a ホウセイ

b 採掘

c キョウジユ

d ダンザイ

e ドジョウ

f キユウダン

問2

空欄 I

解答番号は  。

に入る言葉として最も適当なものを、次の①～⑧のうちから一つ選べ。

- |        |        |        |        |
|--------|--------|--------|--------|
| ① 内政干渉 | ② 面目躍如 | ③ 神算鬼謀 | ④ 過剰防衛 |
| ⑤ 格差拡大 | ⑥ 時代錯誤 | ⑦ 正当防衛 | ⑧ 前提条件 |

問3

空欄 II

解答番号は  。

に入る言葉として最も適当なものを、次の①～⑧のうちから一つ選べ。

- |        |        |         |         |
|--------|--------|---------|---------|
| ① 全面戦争 | ② 不正取引 | ③ 契約不履行 | ④ 不等価交換 |
| ⑤ 言論闘争 | ⑥ 条約違反 | ⑦ 言行不一致 | ⑧ 不確定要素 |

問4 空欄

ア

一つ選べ。解答番号は

29

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑧のうちから

- ① 利潤獲得のプロセスが限界に達したということだ
- ② 利潤獲得の結果が消滅してしまったということだ
- ③ 利潤獲得の結果が完全に裏目に出たということだ
- ④ 利潤獲得のプロセスが全て消滅したということだ
- ⑤ 利潤獲得という目的をほとんど意識しない構図に転換したということだ
- ⑥ 利潤低下により需要低下に陥り、経済成長が困難になったということだ
- ⑦ 利潤低下により需要過多に陥り、経済成長が困難になったということだ
- ⑧ 利潤低下により供給過多になり、経済成長が容易になったということだ

問5 空欄

イ

一つ選べ。解答番号は

30

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑧のうちから

- ① その結果、グローバル・ノースの人々が、掠奪を安易に考えることになる
- ② その結果、グローバル・サウスの人々が、暴動を安易に起こすことになる
- ③ その結果、グローバル・サウスの人々が、掠奪を繰り返すことになる
- ④ その結果、グローバル・ノースの人々が、掠奪行為を反省することになる
- ⑤ それによって、私たち一人ひとりが、この不正を是認することになる
- ⑥ それによって、私たち一人ひとりが、この不正に加担することになる
- ⑦ それによって、私たち一人ひとりが、この不正を意識することになる
- ⑧ それによって、私たち一人ひとりが、この不正を是正することになる

問6 傍線部A「帝国的生活様式」の問題点にあてはまるものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 31。

- ① 帝国的生活様式は、グローバル・ノースからの収奪やグローバル・サウスへの代償の転嫁なしには、維持できないこと。
- ② 帝国的生活様式は、グローバル・ノースへの資金提供やグローバル・サウスからの資源調達なしには、維持できないこと。
- ③ グローバル・サウスにおける大量生産・大量廃棄によって成立する帝国的生活様式は、先進国に暮らす私たちの日常生活を通じて絶えず再生産され続けること。
- ④ グローバル・ノースにおける大量生産・大量廃棄によって成立する帝国的生活様式は、先進国に暮らす私たちの日常生活を通じて絶えず再生産され続けること。
- ⑤ 大量生産・大量消費によって成立する帝国的生活様式の豊かさは、グローバル・サウスからの収奪やグローバル・サウスへの代償の転嫁のうえに成り立っていること。
- ⑥ 大量生産・大量消費型社会である帝国的生活様式にグローバル・サウスも依存しているが、ざり、グローバル・ノースもやがて貧困で苦しむようになること。

問7 傍線部B「ここでの悲劇」にあてはまるものを、次の①～⑦のうちから一つ選べ。解答番号は 32。

- ① 綿花の生産地として有名なバングラデシュにおいても、経済格差がますます拡大しているという悲劇。
- ② 「ラナ・プラザ」の崩壊により、一〇〇〇人以上の尊い命が犠牲になったうえ、その後もバングラデシュで自殺者が続出したという悲劇。
- ③ インド人労働者の参入や熱波のせいで不作になれば、バングラデシュ人たちは借金を抱え、自殺に追い込まれることも少なくないという悲劇。
- ④ 綿花栽培従事者の多くは、経済的に困窮しているバングラデシュの農民であり、そうした経済的弱者が資本主義の構造的理屈からさらに貧困に陥るといふ悲劇。
- ⑤ 大量生産・大量廃棄を是とするグローバル資本主義優位の状況下では、グローバル・サウスも、資本主義に迎合せざるを得ないという悲劇。
- ⑥ 劣悪な条件で洋服を作っているバングラデシュの労働者や、酷暑のなかで綿花栽培に従事している貧しいインドの農民のように、経済的弱者が犠牲になっているといふ悲劇。
- ⑦ 世界中の人々がファスト・ファッションを好むあまり、グローバル・サウスの住民の生活がますます困窮しているといふ悲劇。

問8 傍線部C「耳の痛い指摘」の説明として最も適当なものを、次の①～⑦のうちから一つ選べ。解答番号は 33。

- ① 代償を遠くに転嫁し、不可視化する構造をレーゼニツヒが指摘し批判していること。
- ② グローバル・ノースは、外部からの指摘を何度も聞き入れてこなかったということ。
- ③ グローバル・サウスは、内部からの指摘を何度も聞き入れてこなかったということ。
- ④ 先進国の現在の繁栄は、グローバル・サウスの無知のうえに成立しているということ。
- ⑤ 現在の先進国の繁栄は、グローバル・サウスの犠牲のうえに成立しているということ。
- ⑥ 経済的に豊かな国からの要請は、これまで何度も失敗に終わってきたということ。
- ⑦ 「外部化社会」は、外部性を作り出し続け、さまざま負担を軽減してきたということ。

問9 傍線部D「先進国の人々は単に『転嫁』に対する『無知』を強制されるだけではない」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 34。

- ① 先進国の人々は自分たちの生活をより豊かにしてくれる帝國的な生活様式を望ましいものとして積極的に内面化するようにも強制されていること。
- ② 先進国の生活は単に「どこか遠く」の人々や自然環境に負担を転嫁するだけではなく、その費用を不払いにすることを前提条件にしていること。
- ③ 先進国の人々は、新しいエコバッグを購入することだけで満足してしまい、エコバッグが作られる土地に住む人々や自然への暴力に対してますます無関心になってしまふこと。
- ④ 先進国の人々は、単に新しいエコバッグを購入することだけで満足してしまうだけではなく、それが作られる土地に住む人々や自然への暴力に対して無関心になってしまふこと。
- ⑤ グローバル・ノースの便利な生活は周辺部からの労働力の搾取だけでなく、資源の収奪とそれに伴う環境負担を押しつけていること。
- ⑥ 先進国の人々は自らの生活を豊かにしていく中で遠くの地の人々を犠牲にしているという真実を知らないだけでなく、それを直視しなくなるということ。

問10 傍線部E「その不公正」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。

解答番号は 35。

- ① グローバル・ノースでは自分たちの真実を直視することを絶えず恐れていること。
- ② グローバル・ノースでは自分たちの真実を直視することを絶えず等閑視していること。
- ③ グローバル・サウスでは廉価な労働力が搾取され、グローバル・ノースがその生産物を買  
い叩き、より大きな利潤を上げてきたこと。
- ④ グローバル・ノースでは新しいデザインのエコバッグを購入するだけで無罪放免されたか  
のように、遠くの地での人間や自然への暴力に対して一層無関心になってしまうこと。
- ⑤ グローバル・サウスにおいても新しいデザインのエコバッグを購入するだけで無罪放免さ  
れたかのように、遠くの地での人間や自然への暴力に対して一層無関心になってしまうこと。
- ⑥ グローバル・サウスは「中核」部と「周辺」部に分けられ、その間ではますます経済的格  
差が拡大していること。

問11 空欄 甲

から一つ選べ。解答番号は 36。

- ① 「ラナ・プラザ」の悲劇
- ② 過酷な条件での綿花栽培
- ③ 無遠慮なグローバル・サウス
- ④ 犠牲に基づく帝國的な生活様式
- ⑤ 「ブルマジーニョのダム」の悲劇
- ⑥ 勝ち組であるグローバル・ノース
- ⑦ ファスト・ファッションの売り上げ急増
- ⑧ 単なるファッションにすぎないエコバッグ

問12 空欄 乙 に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑧のうち

から一つ選べ。解答番号は 37。

- ① 資本主義経済終焉後の素描
- ② 労働者も地球環境も搾取の対象
- ③ 新しい「世界システム」論の素描
- ④ ウォーラーステインの主張の錯誤
- ⑤ 従来の学説を覆すウォーラーステイン
- ⑥ フロンティア消滅後の環境問題の実像
- ⑦ 資本主義経済の暗闇としてのパーム油
- ⑧ フロンティア消滅による地域環境問題

問13

空欄

丙

に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑧のうち

から一つ選べ。解答番号は 38。

- ① 解決不可能な環境問題
- ② 蓄積していく環境負荷
- ③ 可視化される環境問題
- ④ マルクス・ガブリエルの指摘の正否
- ⑤ 加害者意識の否認と先延ばしの報い
- ⑥ 後進国でさえ無罪放免されない現況
- ⑦ 先進国が無罪放免されている構造探求
- ⑧ マルクス・ガブリエルによる拡大解釈

問14

本文の内容に合致するものを、次の①～⑨のうちから二つ、選べ。ただし、二つとも正解しなければ点を与えない。解答の順序は問わない。解答番号は

39

40

- ① バングラデシュで綿花栽培に従事しているのは酷暑のなかで作業を行う貧しいインド人の農民であるが、遺伝子組み換え綿花の大規模導入の結果、化学肥料や除草剤を毎年大量に購入しなければならず、不作でなくとも、借金で自殺に追い込まれることも少なくない。
- ② 「外部化社会」や「グリーン・ウォッシュ」という用語は、ともにイマニエル・ウォーラーSTEINによって発案された造語であるが、いずれも資本主義のグローバル化が地球の隅々まで及んだことによる不公平の是正を念頭に置いた言葉である。
- ③ ブラジルのブルマジーニョにおいて、尾鉱ダムの危険性を理解していた労働者たちが低賃金と過酷な労働条件のもとに採掘作業を強要されたのは、貧困ゆえに、居住地すら制限されていたからである。
- ④ ラナ・プラザのホウセイ工場の従業員たちが事故発生の前日に壁や柱の異常に気がついていたにもかかわらず、その訴えが黙認されたのは、そこで働く人々が強制労働を受け入れなければ生活が困難な経済的弱者だったからである。
- ⑤ ウォーラーSTEINの「世界システム」論は、資本主義の本質がグローバル・ノースという「中核」部とグローバル・サウスという「周辺」部から構成され、後者からの搾取のもとに前者がさらに莫大な利潤を上げるという難点を余すところなく指摘した。
- ⑥ ミュンヘン工科大学の社会学者シュテファン・レーセニツヒは、現在の先進国社会の「豊かさ」がグローバル・サウスの犠牲のうえに成立しているという構造的問題を指摘し、それを「外部化社会」と命名し、いちはやく批判した。
- ⑦ パーム油の生産国であるインドネシアやマレーシアでは、アブラヤシの栽培面積が今世紀に入ってから倍増し、熱帯雨林の乱開発による急速な森林破壊は、生態系のみならず現地の人々の暮らしにも破壊的な影響を与えている。
- ⑧ ドイツの社会学者のウルリッヒ・ブランドとマルクス・ヴィッセンは、グローバル・サウスからの資源やエネルギーの収奪に基づく先進国のライフスタイルを「帝国主義的生活様式」と呼び、その問題点の解消に尽力した。
- ⑨ マルクス・ガブリエルの指摘にあるとおり、私たちが現在の秩序の維持を暗に欲しているがゆえに、帝国的生活様式はさらに強固なものとなり、環境危機への対応は未来へと先延ばしにされていく。